

金峯山巔我れほゝえみぬ

著者	南, ?之助
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 7
ページ	6 1 - 6 5
発行年	1918-06-20
その他の言語のタイトル	金峰山巔我れほほえみぬ
URL	http://hdl.handle.net/2298/6802

金峯山巔我れほゝえみぬ

南
清
之
助

日は照りぬ春の肥後の大野原 霞はめぐる大阿蘇の裾

野は廣し錦を織りて 黄に緑にかすみゆく山際 緑川たゆたひ白川さすらふ。

有明の海雲涌きたちて 温泉岳のふところに迷ふ

雲の色海の色照りはゆる筑紫潟 天草山々淡く浮び散れり。

森のひろがり足下に近し 山の波うちよせ來りて 歌ふは鶯笑ふは菜の花。

緑なす金峯の高嶺に 我れたちて瞑黙すなり。

櫻花匂へる御社の前 我れ額づけば花ちりぬほろゝ。

散りゆくは神の心か 我れ來にけり我が心のため。

散る影を逐はず榮ゆる影を逐ふ あだし世の常はこれよ。

人卑しと見れば侮りにけり あだし物もて心を買ひぬ 一切は形を逐ひぬ

心を求むるもの一つもなしと 我れ思へどそは無意味なり。

今こゝに高く立てば 人の世はあだし世よ 我れもすでにあだし男の子

形に蔽はれ情に亂れぬ 思へばいと深しいと遠し

何を捉へ何を求めん 誰か言ひし情なくば世は冷かなりと

我れ情ありて愚かなりき 人笑ひぬ我れ愚かなりと

我れも笑ひぬ我れ愚かなりと 純なる心遠く消にて

人の心永久に濁りぬ へだての城壁固くなりて

我れ悲しみぬ城壁の外 愚かなるものゝ末はかくぞ。

金峯山巔思ひは深し 日は沈まんとす温泉岳のあなた

黄金の杯海に沈みて 平かなる海の表面

眞帆片帆行くは何處。 肥後の大野原蒼茫と暮れゆく

鐘の音麓よりひびきて 日は暮れゆく日は暮れゆく。

ばあんの音寂寥の谷より谷に森より森に 金峯山巔鐘の音あはれなり

櫻散りぬ心なくはらくと 春あはれ花散るかほろゝ

我れ歌ひぬ神の歌を 夜の雲涌きたつ肥後の大野原 夜の山々雲に眠らんとす。

漁火遠く迷ふ有明の海 暗き世よ暗き夜よ 空曇りきぬいと暗く

銀河はそも上か下か 大暗のその真中に

金砂まきし漠々の夜界 銀河の如うつりきぬ龍南の里

手にとる如く浮べる光の里 夜の心を光によめと

金峯山巔夜冷かなり 冷かなる足下の谷間

白き木立暗に光りて 妖怪の如く亂れ踊りぬ。

犬遠吠ゆる麓の方 黒き雲隔てに隔つ

寂寞は我より湧くか 寂寞は谷より湧くか

寂寞とまごゐる我れ さゝやかに歌ひぬ神のみ歌。

大さ暗の中我れ今あり あゝ暗よ心の暗よ

聴けそれ人よ暗のさゝやき 神の心すべてに充ちぬ

我れはこれ汎神教徒 人に言はじ神の我が身

神に心さゝげぬれば 我が身はなし神の身はあり 我れ嬉し純なる心。

金峯山巔神風荒れゆく。大正七年四月十三日午後八時五十分。

老翁語りぬ神の如く。神風に調を合せて。

あゝ翁よ、我れ羨む平和なる生活。満ち足りし思の境。うすき燈火。室は黙して平和に充ちぬ。

火は嬉しくて燃ゆる圍爐裏の中。翁語りぬ我れに純なる心、平和なる心を印しつゝ。

天つ風、東より吹く高らあはれ。

我れ嬉しくてほゝむ。老翁語りぬ。

我れ思ひぬ黙しつゝ。

我れ嬉し神風我が父の心を吹きよせて。

金峯山巔我れはゝねみぬ。

神風荒びつゝ夜は更けぬ。

老翁いねぬ我れと共に。外面の方神風あれて。

ひゞくは唯翁の鼾。我れいねたり老翁がそばに。

なつかしき鼾聞ゆ圍爐裏の邊。

更けゆく夜半にひゞくは翁の鼾。

我れいねぬ。老翁いねぬ。

天つ風静まりて音絶ねぬ。静かなり夜半。

汽笛の音ゆれくるさびし。

永久に永久にいや其の上に。

神風吹きいでゝ我れ嬉しかり。

金峯山巔神風吹きいでぬ。

老翁語り我れ思ふ。我れ聽く圍爐裏の邊。

火は嬉しく燃ねぬ音うちたてゝ。

神風東より吹きぬ我れはゝねみぬ。父母のいます方より神風吹ききて。

老翁語りぬ我れ思ひぬ。

心直き人の言葉、老翁は神の國人。我れきゝて打ち笑む。父の御言葉の如く。

神風尙ほ吹く高鳴りて。金峯山巔夜はふけゆく。

我れは思に耽るなりけり。

神風いよよ吹き。火は燃ねぬ圍爐裏に。

老翁語りぬわが父の如く。我れ嬉し父見る如く。

あゝ老翁よ正しきみこゝろ。我れ慕ふ老翁の心。

神風呼びぬ高らかに。我れはゝにみぬ。火もほゝにみぬ圍爐裏の中。

神風高らあはれ茅屋の外面。東の方より我が父の御聲傳へて。我れは嬉し我れは嬉し。

金峯山巔我れはゝにみぬ。父よ語れ外邊に。老翁語れ圍爐裏の邊。あゝ我れ嬉し、心、火の如く燃えて。語りゆく老翁の顔。榾火に榮えて神の如し。

寂寞の谷より谷に、森より森に。

何ものか音なく惱める闇をふるはしつゝ。

金峯山巔夜半靜かなり。

翁いねぬ我を思ひて。我れいねぬ父を思ひて。

父を思ひて我は嬉し。父の客心にうつりきぬ。

我れはゝにみぬ。我れはゝにみぬ。

金峯山巔我れはゝにみぬ。